

# 言語処理の発達からみた 日本語学習者のテンス・アスペクトの習得

峯 布由紀

## 要 旨

日本語の基本的なテンス・アスペクトの体系は、スル、シタ、シテイル、シテイタの4形式で構成されるが、この使い分けには、動詞句レベルだけでなく、副詞句との呼応といった文レベル、テキストの時間的流れといった文脈レベルの言語処理が関わってくる。

学習者の発話資料を分析した結果、二つの形式で表現可能な意味は、最初、スル、シタで表現され、シテイル、シテイタの使用は遅れること、そして、環境に応じた使い分けができずに誤用となる傾向がみられた。また、誤用は、動詞句レベルの言語処理に起因する誤用から減少し、文脈レベルの誤用は最後まで残るといった過程も確認された。これは、学習者の言語処理可能な単位が小から大へと発達するという Processability Theory を支持する結果と思われる。

## 【キーワード】

時間表現 形式の重なり 言語処理量 誤用

## 1. 研究課題

第二言語習得研究では、学習者に共通する習得順序の存在が指摘されてきた。Pienemann (1998) はその普遍的な言語習得の流れを、学習者の脳内における自動化された言語処理の発達という観点で説明し、Processability Theory (言語処理可能性理論) を提唱している。この理論は、Levelt (1989) の発話モデルをもとに構築された理論である。この発話モデルによると、発話時における脳内の言語処理の過程では、語彙、句、文、複文の順で、下位レベルで処理された情報は、上位レベルに送られ、複数の階層で同時並列的に処理がなされ、発話が行われる。これをもとに、Processability Theory では、上位のレベルの処理には下位レベルで処理された情報は不可欠な情報であり、必然的に言語の発達は、下位レベルのものから発達していくと説明する。語彙⇒句⇒文⇒複文の順に言語処理が発達していくのである。

日本語の基本的なテンス・アスペクト体系は、スル、シタ、シテイル、シテイタの4形式で構成されており、その使用には、動詞句だけでなく、時間表現との呼応関係や、文脈における時間の流れが関わっている (工藤 1995)。つまり、4形式の使い分けにおいては、動詞句、文、文脈と、複数のレベルの複合的な言語処理がなされていると考えられる。

本研究では、誤用を言語処理の失敗ととらえ、次の二つを研究課題として行った。

課題1：使用形式はどのように広がるか。

課題2：誤用のタイプ (句レベル、文レベル、文脈

(複文)レベル) の割合はどう変化していくか。

## 2. 分析

### 2.1 データ

KY コーパス {英語、韓国語、中国語を母語とする学習者各30名 (初級5名、中級10名、上級10名、超級5名) 計90名の発話データ} を分析した。

### 2.2 分析対象

単文・複文主節末で使用されている動詞句、テンス・アスペクトの対立のある従属節内のものを分析対象とした。連体修飾節、そして、他の形式(否定や意思(ヨウ)、テアル、タコトガアル等)は対象外とした。

表1. 意味と形式の関係

	意味	一塊の出来事	反復
(a)	未来	スル シテイル	スル (シテイル)
(b)	現在	(スル※1) シテイル	スル シテイル
(c)	現在(パーフェクト)※2	シタ シテイル	シタ シテイル
(d)	過去(出来事描写)	シタ シテイタ	シタ シテイタ

1. 遂行動詞、一人称の思考・感情に限られる。

2. 現在に結果が残っている過去の出来事を表す (例、落ちている、卒業している)。

### 2.3 分析手順

①. 課題1を調べるために、学習者の使用した、スル、

シタ、シテイル、シテイタを、表1に従って分類し、各意味における形式の分布を調べた。

②課題2を調べるために、誤用を次の三つのレベルに分類し、誤用全体に占める割合を調べた。

(a) 動詞句レベルの誤用：表1の形式の分布から逸脱しているもの

(b) 文レベルの誤用：同一文中の成分との呼応ができていないため、誤用となっているもの

● 時の副詞句との不整合

例1.  $\left[ \begin{array}{l} \text{以前は、夫と日本語で話をするようにしていた} \\ \text{が、すぐ喧嘩になってしまった。} \end{array} \right]$

\*だからもう、ずーっと前から、やめました。わたし叱られますから。 <中 上級>

● 思考表現・感情表現における人称制限

例2. (留学生旅行で温泉に入った時のこと)

\*西洋の人たちは、あんまりそんなことやらない、だから、びっくりしました、あの、温泉に入ったとき。 <韓 上級>

(c) 文脈(複文)レベルの誤用：単文を超えたレベルで誤用となるもの

● 出来事の時間的な流れ：スル、シタは継起的な流れ、シテイル、シテイタは前件との同時性あるいは、後退性を表す。

例3. (T先生の家庭生活を聞いたあと)

\*やっぱ、T先生の家庭生活を聞いたら、日本人らしくないと思ってます。 <中 上級>

● 動詞句以外の要素に焦点を当てる場合

例4. (ロールプレイ：親役のSが遅く帰宅した子供を注意する)

S: \*どこ行ったの? <中 超級>

T: あのう……

### 3. 結果

#### 3.1 形式の使用について

表2は各形式の正用使用者数を示す。使用者の分布表を作成し Implicational Scale で検定した結果、形式の出現順序については、スル⇒シタ⇒シテイル⇒シテイタの順で含意的関係 ( $Crep.=.994>.90$ ,  $Cscal.=0.960>.60$ )にあることが確認された。

表2. 各形式の正用使用者数

形式	スル	シタ	シテイル	シテイタ
正用使用者数	88	85	83	50

稿末資料1は「現在進行」「現在反復」「現在パーフェクト」「過去」の意味で使用された形式の使用分布を示す。同じ時間的意味を表す形式を用いた誤用は、他の形式

を用いた誤用とは別に集計し、横に×を付した。

初級者の使用をみると、「現在進行」以外では、スル、シタの使用者が多く、シテイル、シテイタの使用者は少ない。このことから、二つの形式で表現可能な意味は、最初、スル、シタで表現され、シテイル、シテイタの使用は遅れると推察される。

また、誤用を見ると、レベルが上がるにつれて、同じ時間的意味を表す、つまり、意味の重なりのある形式による誤用に収斂していく傾向にあることがわかる。これは使い分けの困難さを示すものと思われる。

#### 3.2 言語処理の発達と誤用について

言語処理のレベルによって分類した誤用のタイプ(句レベルの誤用、文レベルの誤用、文脈(複文)レベルの誤用)の割合が、言語レベルによってどう推移するかについて見ていく。

表3は、テンス・アスペクト形式の各言語レベルの平均誤用および正用数である。この表からもわかるように、レベルの高い学習者ほど、正用が多く、誤用が少ないことがわかる。

表3. 言語レベル別の平均誤用数と平均正用数

	誤用		正用	
	数	割合	数	割合
初級(n=14) ※1	2.7	14%	16.9	19.6
中級(n=30)	6.5	10%	55.9	62.4
上級(n=30)	5.3	5%	93.9	99.2
超級(n=15)	1.9	2%	108.6	110.5

※1. 動詞の使用のない学習者が一人いたので、14人で平均を出した。

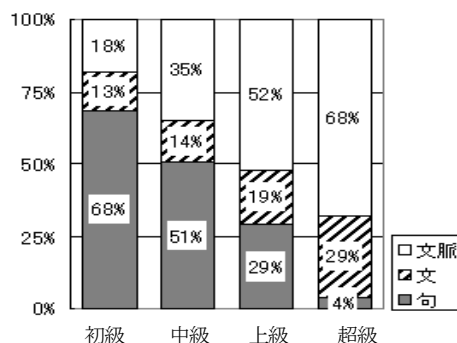


図1 誤用タイプの推移

次に、図1は誤用のタイプ(句レベルの誤用、文レベルの誤用、文脈(複文)レベルの誤用)の割合を言語レベル別に示したものである。この図から、言語レベルが高いほど、句レベルの誤用の割合が少ないことがわかる。これは言語処理の発達が、動詞句レベルのものから発達するためと考えられる。

### 4. まとめ

まず、形式の広がり方として、①シテイル、シテイ

タは、スル、シタに遅れて使用される。②二つの形式で表現可能な意味は、最初、スル、シタで表現され、シテイル、シテイタの使用は遅れるという傾向が見られた。そして、③意味の重なりのある形式の使い分けができずに誤用となっているものも多く見られた。

更に、誤用を使い分けに必要とされる言語処理の失敗という観点でとらえ、誤用を分析したところ、④必要とされる言語処理の単位が小さな句レベルの誤用から減少し、大きな単位の言語処理を必要とする文脈(複文)レベルの誤用は最後まで残るという過程が確認された。これは、Processability Theory で示されるよう

に、学習者の言語処理が小から大へと発達していくためと考えられる。

#### 引用文献

- 工藤 真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現』 ひつじ書房
- Levitt, W. J. M. (1989) Speaking: From intention to articulation, Cambridge, London: MIT Press.
- Pienemann, M. (1998). Language processing and second language development: Processability theory. Amsterdam: John Benjamins

みね ふゆき／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 国際日本学専攻  
mine\_fuyuki@yahoo.co.jp

稿末資料 1：「現在進行」「現在反復」「現在パーフェクト」「過去」の意味における使用表現の推移

意味	使用表現*	初級(n=15)		中級(n=30)		上級(n=30)		超級(n=15)	
		使用平均*	(人数)*	使用平均	(人数)	使用平均	(人数)	使用平均	(人数)
現在進行	○テイル	<b>3.1</b>	<b>(8)</b>	<b>3.4</b>	<b>(30)</b>	<b>6.1</b>	<b>(30)</b>	<b>5.3</b>	<b>(15)</b>
	×ル	1.0	(2)	1.3	(10)	1.2	(5)		
	×その他			1.0	(1)	1.0	(2)	5.0	(1)
現在反復	○ル	<b>5.5</b>	<b>(10)</b>	<b>12.9</b>	<b>(30)</b>	<b>20.2</b>	<b>(30)</b>	<b>24.1</b>	<b>(15)</b>
	×テイル	1.0	(1)	1.3	(3)	1.5	(4)	1.0	(1)
	○テイル	2.7	(3)	<b>2.3</b>	<b>(19)</b>	<b>5.1</b>	<b>(29)</b>	<b>5.2</b>	<b>(15)</b>
	×ル	2.5	(2)	2.0	(11)	1.3	(7)	1.0	(1)
	×その他	2.0	(1)	1.1	(7)	1.0	(1)		
現在パーフェクト	○タ	1.0	(5)	<b>2.3</b>	<b>(25)</b>	<b>4.3</b>	<b>(25)</b>	<b>4.2</b>	<b>(14)</b>
	×テイル					1.0	(1)		
	○テイル	3.0	(2)	<b>2.7</b>	<b>(21)</b>	<b>5.0</b>	<b>(29)</b>	<b>6.3</b>	<b>(15)</b>
	×タ	1.0	(1)	1.5	(15)	1.8	(12)	1.0	(4)
	×その他	1.0	(1)	1.0	(2)	1.2	(5)		
過去	○タ	<b>6.3</b>	<b>(9)</b>	<b>11.5</b>	<b>(30)</b>	<b>10.2</b>	<b>(30)</b>	<b>7.3</b>	<b>(15)</b>
	×テイタ			1.4	(5)	1.5	(4)	1.0	(1)
	○テイタ	1.0	(1)	<b>1.7</b>	<b>(15)</b>	<b>2.2</b>	<b>(17)</b>	<b>1.9</b>	<b>(14)</b>
	×タ	1.0	(2)	1.9	(10)	1.8	(12)	1.3	(3)
	×その他	1.3	(7)	1.9	(14)	2.8	(5)		

※ 使用表現とは学習者が用いた表現で、正用使用の場合は○、不自然な場合は×を付した。

※ 使用平均は次のようにして算出した。 使用平均＝使用総数÷使用者数

※ (人数) とは、当該レベルにおいて、当該表現を使用した学習者の人数を示す。

※ 下線部は当該レベルにおける半数以上の学習者が使用した正用表現を示す。